

新刊 Book reviews

□ Singhadurbar Vaidyakhana Vikas Samiti: **Chandranighantu** A4. 378 pp. 2012. NR (Nepal Rupee) 2,000. ISBN 978-9937-2-5241-6. Website: www.sdvk.gov.np

Publisher: Singhadurbar Vaidyakhana Vikas Samiti, Ministry of Health and Population, Government of Nepal Anamnagar, Kathmandu, Nepal. Phone: 0977-1-4770174, -4770660, -4770692. Fax: 0977-1-4770781.

Chandranighantu is an illustrated Ayurvedic encyclopedia which consists of 8 volumes of Botany (750 figs.), 1 vol. of Zoology (90 figs.) and 1 vol. of Mineralogy (no fig.) with explanations in Sanskrit and Nepalese on the odd-number pages and fine colored illustrations on the succeeding even-number page. It was treasured in Singhadurbar Vaidyakhana (Department of Ayurvedic Medicine) and was seldom available to the public. Recently, volume 1, containing 99 items, is published in a new style. Each item consists of original set and newly added Nepalese and English descriptions on heavy art paper. The price is surprisingly cheap! Publication of succeeding numbers is expected after reducing typographical errors and reconsideration on the arrangement of original items and recent information.

ネパールの研究者から、本書をいただいた。全頁アート紙、重さ2 kgの豪華本である。本書の原典は、私がときどき紹介してきた「ビル・ニガントウ」というアユルベータ医学の本草図譜で、上記「著者名」に記されている機関に保存されている原本は、本誌より一回り大きい厚手のネパール紙（和紙に近い）の両面を使い、片面（奇数頁）に説明、と言うより出典や名称や効能をサンスクリット文とネパール文で記し、反対面（偶数頁）にその植物の着色画があるものを、本の形に綴じたもので、植物8巻750図、動物1巻90図、鉱物1巻（図なし）の10巻より成る。本誌46(12): 374-377 (1971)を参照されたい。今回刊行されたのは、第1巻である。原典の編者はPandit Ghana Nath Devkotaで、宰相Bir Shumsher Rana (1885-1901在任、当時のネパールはRana家専



制の幕政だった)の命を受けて編纂にかかり、次の宰相Chandra Shumsher Rana (1901-1929在任)の時代を経て、1944年の死去に至るまで編纂を続けたものである。植物編の8巻は、1頁1種類が根・茎(幹)・葉・花・果実を一体に着色描画したうえ、生育環境まで描いており、今日の図鑑と比べれば注文は多いだろうが、特に野菜類には見事な出来ばえの絵が多い。動物編では1頁にいくつもの種類が含まれていたり、空白だったりで、未完のものが多い。鉱物編には図はない。面白いのは、大きな対象は縮小描画しているのに、今回の版には含まれていないが、小さなアリなどは実物大に描かれており、拡大描画という技法はなかったのかと思う。

本書は単にNighantu（百科事典）と呼ばれていたが、ときによって上記の宰相の名前を冠して、Bir-nighantuともChandranighantuとも呼ばれてきた。今回の出版によって、Chandranighantuの名が定着することだろう。Singhadurbarは、当時政治の実権を独占していたRana一族の屋敷で、世界最大の個人住宅といわれたもの。王政復古以後はネパール政府の政庁となっていたが、1973年に焼失した。Vaidyakhanaは、アユルベータ薬の製造販売を受け持つ政府の組織で、本邸と

は離れて建っていたため、原本の焼失は免れた。Vikas Samiti は開発委員会とのこと。とにかく、本書の著作・出版権は、この役所にあるということである。

原典では、どの面にも左右の肩にネパール数字があり、左肩のものは頁番号、右肩のものは種類番号である。右肩の種類番号は表裏同じで、ときには同類として記述した次葉の図にも、同じ種類番号がついていることがある。原則として、奇数頁はサンスクリット文とネパール文による出典、名前、薬効などの記述であり、その裏の偶数頁はカラー図譜である。

本書ではこの原典2頁をカラーで記録したうえ、記事については、あらかじめ用意した15ほどの項目の下に、全巻を統一した形式で表示し、その上ネパール語と英語の対訳表まで兼ねさせようという、壮大な企画と察せられる。生薬としての形態、顕微鏡的観察結果、適用症状、成分、処方など、原典にはなかった英文主体の記事も、今回新たに書き加えられており、本書編纂の目的が、ネパール生薬の薬局方を目指したのではないかという印象を受けたのだが、序文などを読むと、そういう意図は感じられない。たまたま手元にあった Kapoor L. D.: *Handbook of Ayurvedic Medicinal Plants* (2001) を覗いてみたら、項目立てはよく似ており、この分野の習慣に従って「近代化」を目指したものと察せられた。英文頁に挿入されたデータはオリジナルかどうかは疑問で、根拠は一通示されていないが、巻末に文献表がある。本書全体を通じての頁番号は、各頁の肩に記されている。なお原典全頁の画像(モノクロム)とネパール文の英訳(R. D. Shrestha 氏による)は、金井が作成したものが東大総合研究博物館植物部門に保存されており、サンスクリット文を含む全文の英訳とモノクロ画像は、富山大学民族薬物検索サイトで見ることができる。

原典の頁付けは、記述ページが先(奇数頁)で、対応する図版ページ(偶数頁)がこれに続くように付けられている。つまり説明文と植物図が一枚の紙の表裏に配置されている。しかし本書では、新たな記事がたくさん加わったため、その長短によって、原典の記述とその図が表裏に現れる場合と、前頁の図と次の図の説明が見開きに現れる場合があり、編集に当たって考慮の余地があったと思う。

私の感覚では、原典の記述頁とその画像は元通

りの表裏の配置を維持し、記述頁の英訳をその次に置くという配置が、本来の Chandranighantu の文化的価値とネパールの古典アユルベータ医学の理解に役立つのではないかと思う。新たな形式の英文・ネパール文の対訳は、至る所で重複した記述が現れて、頁数を膨らませるので、それらは一括して別冊にまとめる方が、使い易いと思うし、現代医学との関係を理解し易いだろう。文字サイズや行間の調整で、うまく収まるものと思う。記事の長短によってできるかも知れない空白頁は、書き込み用のスペースと思えばよい。

図とその説明が一枚の紙の表裏に記録されているということは、一種のカードシステムで、説明文が長くなったとき、別紙に続けずに文字の向きを変えてでもその紙面の中に押し込めてしまうという本書原典のやり方は、本ではなくカードとしての利便性を維持するためと考えることもできる。そうすると、本の形にしてしまったということは、カードとしての利便性を犠牲にしているのかもしれない。

原典のカラー写真の中には、画像の上部が切断されたものがあり、66頁では同じ面の二つの画像のうち、上部の一つは1/3が失われているし、ネギ類の花は、ほとんどが切り捨てられてしまっている。原典は元々は一葉ずつ独立していて、サイズも揃っていたのだが、インドで研究するため持ち出された際、逸失を防ごうと製本したとき、切り捨てられてしまったと聞いている。今回の製版の際の不手際ではない。そういう「首切り」が、図譜としての価値に影響を与えている例が10件を超えるが、おかげで散逸を免れる形になったのだから、「幸い中の不幸」と言おうか。そして、切り捨てられた部分にあった筈の原典の頁番号や図番号が、ちゃんと切断部の上縁に書かれていて、しかも他の部分にある文字と揃っていることや、裏の記述面にはそういう欠損がないことから推して、文字は後から書かれたことを意味する。また、あるはずの図が抜けているものや、図があって説明頁が抜けているものが5件ある。これは拾い落したのか本当に原典にないのか、チェックする必要がある。今回の出版をテストケースとして、以後の編集を再考してもらいたいものだ。それと、英文には誤植がずい分目につくので、校正にも一段の注意を払ってほしい。

本書が厚手で大変重たいのは、全頁アート紙を使っているためである。おかげで原典の色彩は見

事に表現されているのだが、紙質はかなり酸性度が強いのではないかと心配した。ために「中性紙チェックペン」(後出*)で試したら、酸性の反応は出なかった。それにしても、新たに加えられた文字頁まで同じアート紙を使い、文字サイズや行間が大きいのは、当局の意気込みが尋常ではないことを示しているが、使う側の便宜から言えば、もう少し痩せている方が使い易い気がする。価格が2,000ネパールルピーというのも、交換率が円と約1:1であることを考えると、購入し易いことは確かだが、今後の9巻分の予算は、大丈夫なのだろうか。むしろハンドブックとしての現代化を目指さずに、原典に何が書いてあるかがわかるようにする方が、文化財としての価値をPRする役に立ったのではなかろうか。

入手については、書店には出ておらず、表記の役所へ行って購入するほかはないとのことで、国外からの注文はどうすればよいのか、私にはわからない。

本書原典の出版については、故難波恒雄氏や私が、長らくネパール当局と交渉したことがあるが、不首尾に終わった。富山大学は現在でもネパール政府と交渉中とのことだが、本書の出版については、日ネのヒマラヤ植物研究者からの事前の情報はなく、文字通り寝耳に水の出来ごとだった。

本書の出版がどのような構想で実現に至ったのかが、先頭数ページの推薦文や序文に記されていることが期待されたが、全文ネパール語なので、その英訳をDr. Pitambar Gautam 博士(北海道大学)にお願いした。同氏は専門違い(地学)にもかかわらずお引き受け下さり、わざわざ、Mr. Sabita Poudel 氏 (Dept. Pl. Res., Kathmandu) に英訳を依頼し、作成された英文を監修のうえ、提供して下さいました。両氏に対して厚く御礼申し上げる。

また、仲介していただいた御巫由紀氏(千葉県立中央博物館)に感謝する。おかげで、原典と本書の比較が非常にやり易くなった。このたびの出版は、Kathmandu 在住の Keshab R. Raibhandari 博士のおかげで知ることができた。同氏のご配慮に深甚な謝意を表する。(金井弘夫)

*紙の酸性度を知る方法を、紙の博物館(東京都北区王子)に問い合わせたら、厳密には水で抽出してpHを測定する規格があるが、簡便な方法としては「中性紙チェックペン」というものがあることを教えられた。これは紫色の指示薬を含ませたフェルトペンで、これで紙をなぞると、酸性ならすぐに黄色になり、中性ならゆっくりと黄緑色に変色し、アルカリ性なら元の紫色を数分は保つ、というものである。ご教示いただいた紙の博物館の広田 寛氏に御礼申し上げる。中性紙チェックペンの注文・問い合わせは、下記にMailまたはFaxで申し込むこと。店頭販売はしていない。また長期保存は無理で、とくにキャップ開封後は、効果が徐々に失われるとのことである。本書の紙質を、紙の博物館にあったペンでチェックした結果と、購入したばかりの新品でチェックした結果は、異なっていた。また、なぞった跡は色が残るので、貴重資料のチェックには配慮が必要である。(株)国際マイクロ写真工業社資材販売部.162-0833 東京都新宿区筆筒町4-3. (Tel 03-3260-5931. Fax 03-3269-4387. Mail: s@kmsym.com). 3本セット単位で送料共2,325円

手元の本、新聞、雑誌などを片端からチェックしてみたら、1990年以前は酸性紙が目立ち、それ以降はアルカリ性紙が多かった。酸性紙が問題化したのは1990年あたりなので、発行者側、あるいは製紙業界が慎重に紙を選ぶようになったのだろう。